

シンポジウム—ソウルの都市再生戦略

前ソウル市長・李明博先生来校講演・討議

都

市計画も韓流に学べ。11月8日、本郷キャンパス安田講堂にて、国際シンポジウム「ソウルの都市再生戦略」が開催された。主賓の前ソウル市長の李明博（イ・ミョンバク）先生は、ソウル市中心部を流れる清溪川（チョンゲチョン）の再生をはじめ、革新的な都市政策を短い任期の中で次々と軌道に乗せてきた敏腕の持ち主。本シンポジウムでは、当研究室の西村幸夫教授を司会とし、李先生の講演と講演と本学教授陣との討議を通して、躍動するソウルの都市再生の理念と実践の詳細をうかがった。会場は建築系三専攻の関係者のほか、外来者も多数と非常に盛況。聴衆は、2時間あまり、日韓二ヶ国語が飛び交う講義と討論に深く耳をかたむけた。

前半～李明博先生講演 「世界都市に向かうソウルの夢」

【導入～今回の講演の目的について】

李先生は、まず隣国同士の日本と韓国、その首都である東京とソウルの類似を指摘した上で、両者の発展には相互理解が不可欠と考えており、今回の講演がその一助になれば素晴らしい、と述べられた。

【ソウル都市政策の3つの戦略】

ソウルのグローバル化と①便利で②温かく③活気溢れる、という理想の都市を目指す上で、採るべき戦略は3つあったという。

- 経営マインドの導入
公務員間の競争推奨、海外派遣、予算の健全化
- 人間中心志向
人間尺度、合理性と感性、弱者に対する公平性
- 持続可能な発展の重視
環境第一、開発第二の優先順位



【ソウルにおける4つの都市事業】

李市政においては、以上3戦略の具現として、4つの事業が特に大きな成果を残したといえる。

- ①高架高速の撤廃、清溪川の復元
- ②バス路線網の再編など交通改革
- ③旧市街地の再生
- ④電子政府の推進



▲清溪川の再生事業

【まとめ】

李先生は、都市計画では①ビジョン（何を？）②実践の力量（どうする？）のいずれを欠いてもならないと言う。そして“Think globally Act locally”という聴衆へのメッセージで講演を締め括った。

後半～パネルディスカッション 「ソウルの都市再生戦略をめぐって」

後半では李前市長、西村教授の他、都市工学系より大西隆・大方潤一郎両教授、土木系より家田仁教授をパネリストに迎え、各教授が講演に対する感想と質問を李前市長にぶつけるという形で討議が行われた。

挙げた感想としては、

- 4年間で複数事業を完遂する速度が凄い。
 - 制度面でも韓国の都市計画は先行している。
 - ソウルの各事業の背景に明確な理念がある。
 - 韓国の都市計画者には国際性がある。
 - 公共の大規模事業に対し、市民の支持が得られているという点が素晴らしい。
- といったものであった。

以下は一問一答。

Q 首都圏と他地域の格差がある中で、国土の均等な開発、あるいは首都移転という施策に関してどう考えておられるか？（大西教授）

A 地域間の公平は重要だが、各都市の多様な特性を伸ばすことが第一で、それに伴う格差は必然。首都機能移転はありえない。

Q 震災等外圧により抜本改革が迫られる日本の都市計画とは異なり、ソウルの大規模都市事業が自発的に進んだ要因は？（家田教授）

A 清溪川に関しては、世界都市ソウルの個性を作る上で最優先の事業だったこと、都市環境の改善という理念に説得力があり、撤去した高速の代替サービスを個々のレベルで提示したことで、市民の理解が得られたことが大きい。

Q 迅速な事業実施の一番の秘訣は？（大方教授）

A 公務員の体質を変えること。海外経験を積ませ、課題は迅速に処理するようにしたことで、公共施策に対し市民の理解が得られるようになった。

text _ Ishii
photo _ Ito Masato

追い出し&歓迎コンパ実施

秋の研究室、ゆく人くる人



▲研究室の新メンバー
リーブス教授（左上）
ティアムD1（右上）
シデルM1（下）

▲満面の笑みの阿部博士（左）と大谷修士

text_Ishii

秋

も出会いと別れの時期。シンポジウム終了後の11月8日夜、研究室を去るメンバーのお別れ会と、新しく研究室に迎えるメンバーの歓迎会を兼ねたコンパが開催された。

主役は今秋研究室を卒業される阿部博士・大谷修士と、新しく研究室のメンバーとなったリーブス教授・ティアムD1・シデルM1。

式の途中では、タイ旅行を牽引したユイD2・ポンサンM1・伊藤M1の旅行係のねぎらいも含め、係から花束とプレゼントの贈呈が行われた。講演会後の過密日程を縫って西村教授も駆けつけ、会は終始笑顔のうちに進んだ。

蔵に灯る三月の成果 喜多方—まちづくり塾ミニ発表会

吉田 拓 (M1)

まちづくり塾もいよいよ最終章に突入である。今回の目的は、今まで高校生達が発案し、形にしてきたものを住民の方々の前でミニ発表会・展示会を開催することだった。

正直なところ、最初は不安ばかりだった。成果物はちゃんと完成するだろうか、会場設営は上手くいくだろうか、お客さんは来てくれるだろうか…。これらの不安を拭い去るため、様々な策も講じた。しかし我々の心配とは裏腹に、発表会は予想以上の出来だった。彼女らのアイデア満載のパネルや模型、横田塾長による塾風景紹介の映像をはじめ、イルジ副塾長発案の照明やコタツなどきめ細かいセッティングも素晴らしかった。そして何より、大勢の前でも堂々と発表してくれた生徒さん達の度胸も見事だった。またこれらに加え、多くの住民の方々が寒い中会場へ足を運んでくれた事には私自身涙が出そうになってしまった。

まちづくり塾で生徒さん達と会うのも次回の本番発表会で最後になる。蔵で彼女達と過ごした日々は我々にとって掛け替えの無い経験である。その経験をより素晴らしいものにするためにも、次回の本番発表会に向けて万全の準備をしなければならないのである。



▲力作のA1パネルを前に、まちづくりプランを発表する塾生のみなさん(左)
熱心な聴衆との熱質疑応答のやりとりも多数見られた(右)

リース「まち探偵団」 本郷・上野を歩く

大学院・水曜4限の講義「Preservation in United States—A Cross cultural Perspective」では11月、2回のユニークなまち歩きを行った。

11/2: 本郷通り 正門から弥生交差点までの区間を往復、距離にしてわずか600mばかりの「まち歩き」だったが、のっけからリース節が全開。正門での集合写真撮影を済ませるや、歩道に沿ったレンガ塀—深夜にファミリーマートへ向かう我々が、いつも足がかりにしているアレだ—のつくり、修復具合と保存状態等についてひとくさりの蘊蓄。弥生交差点で向かいに渡ると、沿道建物同士の「隙間」をぬかりなくチェックし、壁面と軒先の線を一軒一軒確認して、「まちなみ」の原形と、現状における歴史の重層を描き出してみせた。



▲リース「探偵」、レンガを語る

11/16: 上野駅周辺 公園口に集合して、まずは「パンダ橋」へ。駅の上空に広がる低利用の広場を前に、「ママチャリ置き場」構想が披露された。錯綜するペDESTリアン・デッキに降り立って、駅正面口を観察する。何が新しく付加された要素で、どのような意味が込められているのか。問いかけは駅舎の中、レトロ館に入っても続いた。個々の建築部位のデザインについて年代が推定され、本郷通りの際と同じく、「現在」の姿の中に様々な時代のレイヤが発見されていった。



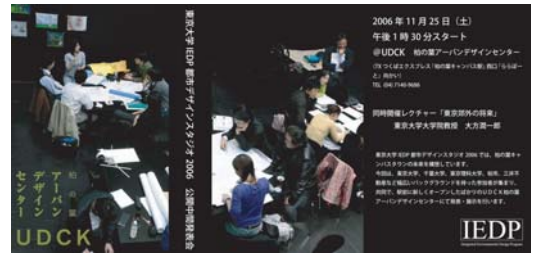
▲ここがママチャリ置き場に…

編集後記

ひとこと。…最近のマガジンは文字飽和との噂を聞きますが、どうなんですかね？(Ishii)

柏アーバンセンター予告編 内覧会に期待高まる

text_Shiozawa



▲アーバンセンターのプレゼンポスター

11月20日、柏の葉キャンパス駅前に柏の葉UDCKがオープンしました。ついこの間まで基礎しかなかったその土地に、急ピッチで組み立てられその全貌も明らかになりました。

すっきりとした白い外観とは対照的に、内部は全面黒く天井の高い大空間。脇には広いウッドデッキを抱え、多くの訪問者を受け入れる準備は万端です。25日のプレゼンテーションに向けてスタジオ参加者も議論を重ねて邁進しています。



プレゼン詳細次号にて。

社説 研究室環境美化マスタープラン を作成せよ！

text_Bannai

人口過密化、プロジェクトの過熱化に比例するように、9F院生室が醜くなっている。初めて研究室を訪れた人は、その雑然ぶりに一瞬たじろぐ。とある研究室08は、「きたないと言っても、生産性を追及した『工房』という趣ではなく、むしろ『豚小屋』が近い」と慨嘆した。公共スペースへの食べ物、飲み物のゴミ放置。プロジェクトBOXからのなし崩し的なみ出し。不要な電気機器等が長く置き放しになっている傍らで、少なくない蔵書は有効に活用されているとは言い難い。空間をデザインすることを本分とする「都市デザイン研究室」の根城が『豚小屋』とは、あまりにもお粗末ではないか。

問題提起としては、過去に幾度もなされてきたことだ。そのたびに、「趣旨にはおおむね賛成だが、具体的な行動プログラムが提示されなければ行動のしようもない」という無言の大勢が勝り、研究室環境は猥雑化の一途をたどってきたのだ。そうした状況を打破すべく、マガジン編集部は以下の段階的行動を提案する。

まずは、年末大掃除だ。不要物を捨て去り、捨てられないものも、必要度・使用度に応じて配置を考える。これを本格的に断行するだけでも、だいぶキレイにはなるはずだ。ただ、これはあくまで第一歩だ。年明け早々には、主に公共机を中心としたスペースについて、配置とデザインを検討していく。プロジェクトのミーティングの後には毎度紙とゴミで溢れかえり、機能麻痺を起こしている大机は、研究室の現状を映し出す鑑と捉えられよう。合理的で美しい空間計画を、知恵を結集させて実現する。コンペ形式がよいのではないか。

更に将来的には、プロジェクトや個人スペースの利用について、ガイドラインを作成していく。著しく公共のスペースを侵食する使い方、美観を損ねるものの置き方、など、現状の課題を抽出し、あるべき将来像を描いた上で、具体的な指針を…皆まで言う必要もなかる。要は、他人様のまちでえらそうにもの申していることを、足許の小空間でちょっとばかりやってみませんか、ということだ。「マスタープランはもう古い」とうそぶく前に、大掃除に集結しよう。

というわけで、美化委員の指導の下、近々9F大掃除を行いましょう。アイデア大募集。



▲これでいいのか大机？